

胸腺カルチノイド術後に巨細胞性動脈炎を発症した1例

矢口 綾子^{1), 2)} 稲田 一雄^{1), 2)} 前川 信一^{1), 2)}
岩崎 昭憲¹⁾

¹⁾ 福岡大学病院呼吸器乳腺内分泌小児外科

²⁾ 国立病院機構大牟田病院呼吸器外科

要旨：症例は72歳男性。2016年X月に前縦隔腫瘍に対し胸骨正中切開による胸腺胸腺腫摘出術を施行した。病理診断は非定型胸腺カルチノイドであった。術後経過は良好で術後15日目に退院し外来通院していた。しかし術後3か月目に食思不振・体重減少が出現し、症状が持続するため、術後4か月目に入院精査を行った。入院後4日目に弛張熱が出現し1ヶ月以上持続したため、術後創部感染を第一に考え熱源の精査を行った。原因特定に難渋したが、精査開始後1ヶ月半後に左眼視力低下を契機に“巨細胞性動脈炎”の診断となった。術後不明熱では創部感染の可能性を考慮するが、それが否定された場合には膠原病等内科的疾患の存在を考え、幅広く精査を行う必要がある。

キーワード：術後不明熱，胸腺カルチノイド，巨細胞性動脈炎，胸骨正中切開